別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　髙村 夏輝

高村夏輝氏の提出論文「ラッセルのセンスデータ論再考」の内容はおおまかに三つに区分することができる。(1) バートランド・ラッセルの認識論は従来「基礎づけ主義」と呼ばれる立場の典型とされ、批判されてきたが、その従来の定説に異を唱え、ラッセルの認識論が「分析の方法」と呼ばれる斉合説的な方法論に従っていることを明らかにする。(2) 分析の方法に従って、ラッセルがどのようにセンスデータ論を導いたかをテキストに即して読み解き、そのセンスデータ論の姿を明らかにする。(3) ラッセルから読みとったセンスデータ論に対し、その不備を自らの議論によって補完した上で現代においても有力な立場として提示し、それを擁護する議論を展開する。

まず(1)と(2)に関しては、きわめて重要な議論が綿密なテキストの読解に基づき説得力をもって展開されており、非常に高く評価された。ラッセルは、色や形の現われのような、物の性質ともあるいは認識主体の意識への現われとも、どちらとも捉えられるようなものに対して、物でも意識でもなくセンスデータという対象を導入し、センスデータが色や形といった性質を担うとする。この議論は、従来、知識の確実な基礎としてセンスデータを考え、そこから確実な知識の体系を構築する試みとして解されてきた。そしてそのような基礎づけ主義的なセンスデータ論は多くの批判に晒され、現代ではほとんど顧みられなくなっている。ところが、それに対して高村氏は、ラッセルの方法論が基礎づけ主義ではなく、われわれの信念全体に潜む不斉合を解消しようという試みであったと捉えなおす。すなわち、われわれの信念の全体をデータとして、それを導くような諸前提を分析によって析出し、その諸前提を斉合的なものに改訂していくという作業が、ラッセルの方法論だったというのである。そしてセンスデータはまさにそのような方法によって要請されたものであったと論じる。このようなラッセルの解釈は、高村氏が世界で初めてというわけではないが、本論文ほど徹底的に論じたものは類を見ないと言えるだろう。本論文によって、ラッセルの認識論における新しいラッセル像が描き出されたと言える。

(3)では、こうして新たに描き直されたラッセルのセンスデータ論を、現代哲学の土俵に上げ、現代の代表的な議論と戦わせた上で、センスデータ論の優位を確立することが試みられる。さすがに、現代でも論争状況にある中で、センスデータ論に勝利宣言をさせるには至っておらず、ここの議論に関してはさまざまな疑問や反論が寄せられた。しかし、上で述べたように現代では顧みられることのなかったセンスデータ論を、現代の論争の土俵にのせて戦わせるまでに刷新したことは、高く評価される。

全体として、質・量ともにこれだけの重みのある力作を仕上げた力量は、全審査委員の一致して評価するところであった。以上から、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。